

## 戦争と現在

鹿児島玉龍中学校 二年 北村 悠太郎

今年は戦後七十年という節目の年をむかえた。日本が大きな過ちをおこしてからもう七十年という日々がすぎてしまったのだ。ぼくが第二次世界大戦のことをはじめて知ったのは小学校一年生のときだった。その時の担任の先生が、戦争はやってはいけないということや、戦争では多くの人が死んでしまうということを教えてくださいました。その時は、戦争はこわいもので、たくさんの方が死んでしまふものと思っていなかった。しかし、学年が上がっていくごとに、先生たちからさらに戦争のことについて教えてもらった。だんだん戦争のことについての関心が高まって、テレビで戦争のことについて放送していることがあると、積極的にみるようになった。小学校六年生になると、歴史の学習が始まり、そこでも戦争のことを学び、さらに戦争への関心が高まってきた。

ある日、ぼくは祖父の家について祖父から戦争の話聞いた。祖父は戦時、小学生くらいでその時は多くの年齢と同じくらいだった。そのころの祖父は防空ごうに身をかくしていた。その時はたくさん友達や同級生がいたそうだった。しかしその時、アメリカ軍により爆弾が祖父のいる防空ごうにおちてきた。そのとき、その防空ごうの中で生きのびた人は多くの祖父だけだったそうだった。ぼくはその話をきいて、戦争の生々しさを感じた。もしそのとき、祖父が亡くなっていたらぼくも、父も兄弟もいなかった。そう思うと戦争のこわさを改めて実感した。

現在、戦争を経験した人は日本では少なくなってきた。だから戦争体験者の話をきくことは、今のうちにおこななければならないことだと思う。ぼくの祖父のように、戦争を体験したことのある人はもう少ない。だから、戦争を体験した方々は後世に戦争とい

うものがどういふものなのかを伝えていってほしいと思う。そしてその話を聞いた若い世代の人々は、それを次の世代へと伝えていけばよいと思う。

最近の若者に多いようだが、日本が戦争をしたことも知らずに、平和に暮らしているのがあたりまえというような考えをもっている人がいる。これは、人間としてどうであろうか。過去の人間の過ちを知った方が、絶対自分のためにもなるし、過去を知らずに未来を考えることはできない。人間として、人間の歴史は知っておくべきだ。平和である今こそ過去を考えたり、学んだりする余ゆうはあるはずである。

戦争の中でもぼくが特にイメージがあるのは、特攻隊だ。特攻隊とは、飛行機に爆弾をつけて敵にとっしんする自爆的な部隊である。その時の特攻兵たちの気持ちはどうだったのか。自分の命が消えるのを分かっている、飛行機でとびたつのだ。なのに兵士たちは笑顔でいる。みおくる人々もバンザイといっている。死ぬことを分かっている。飛びたつというのは、ぼくは絶対にやりたくない。それをきようせいのやるのが戦争だ。生きたいのに生きることさえ許されない。そんな悲しい世の中が七十年前にあったのだ。

だからこそぼくは、戦争によって失われるもの、戦争によってどれだけの人がぎせいになるのかを、後世の人々へ伝えていきたい。そして世の中の人々が二度と同じ過ちをおこさないようになればいいと思う。しかし、現在でも残念ながら戦争がおこっている地域がある。ぼくはそのような状況が、一秒でも早く終わることを願っている。またそういう戦争をおこしている人々は過去の過ちを知っていないから戦争をやめられないのだと思う。だからこそ、最近の若者は今のうちに戦争の話を聞き、それを伝えていくのが役めだと思う。戦争はまぼろしではなく実際にあったのだから。